教えて！先生
日本人形の衣裳にとことん迫る ＼特別編／

ご質問にお答えします

日本人形の衣裳にとことん迫る本企画。人形の衣裳に使われている文様や生地はもちろん、着せ方についても詳しく解説していきます。今回は特別編として、五月飾りと雛人形に関する質問に日本人形文化研究所の林直輝所長にお答えいただきました。
商戦でのセールストークにお役立てください！

五月飾り編

**Q 五月飾りの選び方の基準を教えてほしいです。
雛人形だと衣裳の違いや、お顔の違いがありますが、
例えば、鎧兜ではお客さまはどこを見て選べばよいのでしょうか？**

A 選び方は買う側の予算と好みの問題なので、売る側に常に正解があるわけではありません。ただ、工芸品としての良し悪しということであれば、五月飾りの甲冑の場合も、雛人形同様に素材の違い、技法の違い、技術力の違いが大きなポイントになります。いずれも五月飾りのモデルともいうべき本物の甲冑の素材と技法、そして技術力が基準となり、それと比較して、いかに本物に近いかを評価すれば分かりやすいと思います。

たとえば、本物の甲冑であれば、兜の鉢や、金具廻りと呼ばれる部分は鉄板を切って作りますが、安価な量産品ならばアルミその他の金属やプラスチックを使用します。兜の吹返しや眉庇（まびさし）、鎧の弦走（つるばしり）などの絵革は、本来、鹿革を型染したものですが、安価な量産品ならば合成皮革や布、紙に印刷したものが代用されます。

家地（いえじ）と呼ばれる布帛（ふはく）部分に使用する裂は、雛人形と同じく、高級品であれば京都西陣の本金金襴が使用されます。また、歴然とした差が生じるのは、威（おどし）糸や忍緒（しのびお）等の紐類です。これらは本物では絹の組紐が多用されています。五月飾りでも「正絹」と表示されたものは多いのですが、一口に正絹といっても雲泥の差があり、絹糸の質、紐の組みの良し悪しが金額にも直結するのです。

技法としては、本物の甲冑が本小札（こざね）式のものならば、小札の一枚一枚を牛革で作るのが本当ですが、五月飾りでは厚紙で代用するか、金属板をプレスして小札風に見せたものがほとんどです。塗装も本当は漆ですが、五月飾りではほとんどがカシュー（ウルシ科の常緑小高木）などです。錺（かざり）金具は高級品なら手彫（地彫）でしたが、現在ではほとんど見られず、鋳物で高級とされています。

職人の技術力に関しては、製品が細部まできれいに出来ているか、丈夫に出来ているか、といった点は言うまでもありません。造形やバランス、色彩のセンスというような点も評価するべきですが、この辺りは買う側の好みにもよります。

なお、いわゆる「京甲冑」と「江戸甲冑」は、それぞれがモデルとしている本物の甲冑と、産地の基本的な技法が異なっているため、両者の間に優劣をつけることは困難です。

1/2 縮尺 紺糸威大鍬形兜。鎌倉～南北朝期頃の意匠を実物の 1/2 サイズの寸法で取り入れた飾り兜。加藤威（加藤一冑工房）2024 年

雛人形編

Q 衣裳着の座っているお雛様と立っているお雛様の違いは何ですか？

A 立っているか、座っているか、そのポーズの違いだけです。雛飾りの主役は男女一対の人形ですが、それが古式の扁平な立雛（紙雛）ではなく、衣裳着で貴族の姿に作られるようになった最初の頃（江戸時代前期）から基本的に座り姿でした。雛祭りの全国的な浸透とともに座り姿の雛が一般に普及し、雛人形といえば男雛も女雛も座り姿であると広く認識されたからこそ、その変わり型として立ち姿の雛が作られたと考えられます。

Q そもそも立ち姿の雛には何か意味があるのでしょうか？

A もともと特別な意味が込められているわけではありません。座り姿の雛が当たり前である中で、見た目の珍しさを狙って創られたと考えられます。いわば、江戸時代における創作雛や変わり雛の一種だったといえるでしょう。ただし、近代以降に作られた立ち姿の雛のなかには、皇室のご慶事（天皇の御即位、皇太子の御成婚など）を奉祝（ほうしゅく）する意や、そのご慶事にあやかろうという願いが込められている場合もあります。

Q 衣裳着の立ち姿の雛はいつからあるのですか？

A 江戸時代中期に作られたものが現存しています。しかし、江戸時代に作られた数はごく少なく非常に珍しい存在でした。大正時代以降、京都の「丸平大木人形店」、東京の「永徳斎」といった高級人形店で、市販の一般的な商品とは異なる高級品として作られることがありました。特に、丸平大木人形店では、全国の名家の注文に応じ、男雛に黄櫨染（こうろぜん）御袍を着せた立ち姿の雛を何組も作りましたが、いずれも贅を尽くした最高級品でしたから、「立ち姿の雛＝高級品」というイメージがうまれました。

一方、東京では、昭和 34 年（1959）の皇太子殿下（現・上皇陛下）の御成婚にちなみ、皇太子同妃両殿下を模した立ち姿の雛人形が作られました。これは当時の一般的な雛人形と比べれば高級品でしたが、それでも丸平大木人形店のものなどより、ずっと安価でした。ただし、制作数が多くなかったので、広く普及するには至りませんでした。

現在の人形業界に直結する決定的な転機は、平成初年に、即位礼や、秋篠宮殿下の御成婚、皇太子殿下（現・天皇陛下）の御成婚と皇室のご慶事が続き、そのたびに、皇族の束帯姿と五衣唐衣裳（十二単）姿がメディアで紹介されたため、そのお姿をモデルとして、装束の色目や文様なども再現した立ち姿の雛人形が数多く作られたことです。特に、宮内庁の御用を承る東京の老舗人形店が発売したものは、再現性の高さと価格の手頃さによって人気を博し、これに追随して多くの人形メーカーが立ち姿の雛人形を手掛けるようになりました。

立親王 沙綾香。松崎光正（松崎人形）2023 年。東京で祖父の代から衣裳着人形を製作する松崎氏による立ち姿の雛。